

歩兵第十六聯隊とガダルカナル島作戦

【第2回】

元新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

聯隊は、マタニカウ河谷への兵力集結のため後退中、十一月二日夜、軍命令により海岸道方面の危急を救うべく、全兵力の集結を待つことなく、既に集結した約三百名の兵力を以って急遽反転、夜行軍を以って丸山道を後退し、十一月五日夜、勇川西側凹地、軍司令部付近に集結した。

【百武台・宮崎台の攻撃】

十一月六日軍命令により、住吉支隊の指揮下に入り、宮崎台～百武台～海岸に亘る間に陣地占領、敵を拒止した。住吉支隊は死力を尽くして防戦し、弾薬が涸渇した第一線は、手榴弾及び白兵戦を以って善戦し、敵の攻撃を頓挫させた。

この頃現地において、堺新聯隊長を迎えた。聯隊長は直ぐに一個中隊を南部宮崎台に、大隊長の指揮する約二個中隊を海岸道方面第一線に増加した。

十一月八日、残存兵力を併せ指揮し、堺部隊と命名され前任務を続行した。

十一月十日午前六時以来、千名を下らぬ敵は、優勢な砲兵及び飛行機支援のもと部隊正面に攻撃して来たが、陣前至近で多大の損害を与えた。敵は更に同夜攻撃して来たが、ことごとくこれを撃退し、沖川の線に敗走させた。

敵の遺棄死体五十、我が損害、戦死十、負傷二十一。

【沖川・小川付近の攻防戦】

聯隊は敵を急追し、十四日夕、第一線を以って沖川の線に進出、爾後の準備をすると共に第三大隊の一個小隊を小川の線に進出し、歩兵四聯隊には百武台に予備陣地を構築させた。

十一月十六日、聯隊は主力を以って小川の線に進出し、北部堺台～海岸道に亘る間に拠点を占領した。

十一月十九日午後、約三百の敵が優勢なる砲兵支援の基に、我が左第一線正面に来攻し

た。第三大隊は同日夜、全力をあげて敵を急襲し終夜乱戦奮闘を続け、翌払暁山地方より敗走中の敵の背側を攻撃し大打撃を与え、多大の遺棄遺体と兵器弾薬を放棄させ、倉皇としてマタニカウ河河谷に敗走させた。

戦果、迫撃砲一門・無線機一機・軽機関銃二挺・擲弾筒三器・小銃弾薬多数。
遺棄遺体五十、我が損害、戦死二十九、負傷十九。

十一月二十三日午前七時頃から、河谷に敗走した敵は新鋭部隊を増加し、優勢な砲爆撃支援のもと再び殺到して来た。

我が死傷は続出し、特に右第一線、第一大隊は苦戦に陥り、敵は遂に陣地左翼の一角に突入して来た。大隊長は予備隊を揚げ、右側方より突撃を敢行しこれを撃退、辛うじて陣地を保持した。

聯隊長は急報に接し、行李員に至るまで急援し該敵を撃退し陣地を死守した。米軍は同夜及び翌二十四日払暁、反復攻撃をしてきたが、歩兵四聯隊から一個中隊の増員を得て、ことごとく敵の攻撃を撃退した。然し敵は至近な距離に陣地を構築したので、これと相對峙することとなった。

十一月二十五日から一月十五日の間、敵と至近距離に對峙したが、この間殆んど連日連夜、砲爆撃、小出撃に会い、加えるに糧食欠乏、マラリア流行等で兵員の大部分は栄養障害と日々兵員減耗し、聯隊の戦闘員実に百数十名に至った。

聯隊第一線の第三大隊正面に於いては、一月十五日午前七時頃、約五百名の米兵が戦車五台を伴って全正面に亘り攻撃して来た。

我が第一線は死傷続出、重火器も米軍戦車砲により破壊された。午後二時頃、敵戦車は第一線左翼陣地を蹂躪し、敵歩兵は大隊の背後に侵入するに至った。しかし大隊は依然現陣地を死守した。

十九時頃、右第一線は陣地を徹し後退開始、我が第一線は、十六日零時三十分撤退を開始し、宮崎台に陣地を占領した。この時聯隊の戦闘員、僅か百四十名であった。

【日本軍の撤退作戦】

三十一日、軍司令官は第二師団に対し、二月一日日没をまって企図を秘匿し戦線を離脱、乗艦地エスペランス、カミンボへの集結を命じた。

歩十六各隊は、二月三日朝集結を完了した。四日日没までに乗艦準備を完了し、日没と共に行動を起こし乗艦地に集結、駆逐艦は予定の如く、午後九時入泊した。

待ちに待った各隊は、病人を第一に、それから一同舟艇に乗込んだ。艦上よりは海軍兵が力強い手を差し延べて引き上げてくれた。

海空からの敵の妨害はなく二時間で乗船を終了し、水雷戦隊は、昭和十八年二月四日午後十時、泊地を出発。悪夢のガ島を後にブーゲンビルに向かった。この夜月はなく暗黒の海上は波がやや高かった。

【米軍の誤判断】

米国の軍事記者、ロバート・シャーロッドの太平洋戦記に次のように書いてある。

「太平洋艦隊司令長官ニミッツ元帥も、日本軍のこの撤退作戦の熟練と迅速には敬意を表した。それはちょうどハルゼー中将旗下の米軍艦隊が、日本はガ島に更に増援部隊を送るものと予想していた虚をねらって敢行された。又、米軍がエスペランス岬に対する追撃がなかった理由は、ラバウルには日本の大艦隊が集結している。新鋭の軍隊（矢野部隊）は既に前進している。日本海軍の飛行機は猛烈にやってくる。退却する日本軍も中々反攻が激しい等の理由から反撃を恐れたからであった」

ガ島撤収は、各隊の努力と米軍の過失に幸いされ、予想外の成功裡に終了した。米軍が「今一押し」すれば、日本軍は全滅（玉砕）の悲運に会ったものと推測される。

歩兵第十六聯隊の将兵は、黙々として戦い抜いた。困難な状況下に戦うこともまた武人の嗜みである。

弾丸なく、食なく、銃と剣のみで戦い抜いた将兵二千五百余名のうち、銃を取り得るもの漸く百四十名となっても、なお軍旗を中心として一糸乱れず四ヶ月に亘り死闘したことは、世界戦史にも希有なものであって、列強の斉しく驚嘆するところであった。

（新発田聯隊史より）